

□阪神・淡路大震災時における消防活動

西宮市消防局長 岸 本 健 治

1 はじめに

「阪神都市圏の中でもユニークな「文教住宅都市」西宮市は人口いまや 42 万人, 物心ともに豊かな真に“住み良い西宮”実現のために不断の努力が続けられている。……」これは西宮市を紹介するプロフィールの一節である。この「住み良い西宮市」が震度 7 により無残にも崩れ落ちた現状を報告する。

2 現勢 (H. 7. 1. 1 現在)

・市勢	面積	99.86 k m ²	
	人口	424,101 人	
	世帯数	163,785 世帯	
・消防局	組織	1 局 4 署 3 分署	
	吏員数	337 人 (実員)	
	車両数	ポンプ車	7 台
		タンク車	8 台
		救助工作車	3 台
		救急車	9 台
梯子車		4 台	
その他	30 台		

・消防団	組織	1 本部 33 分団
	団員数	731 人 (実員)
車両数	指揮車	1 台
	ポンプ車	38 台

3 被害の状況 (H. 7. 7. 19 現在)

・人的被害	死者	1,088 人
	・建物の倒壊	全壊
	半壊	27,276 世帯
・火災	発生件数	41 件
	焼損棟数	90 棟
	焼損面積	7,784m ²
	り災世帯	159 世帯
	り災人員	338 人
	死者	13 人

被災直後(午前 7 時まで)の火災件数は 22 件。

・救助	出動件数	610 件
	救出人員	658 人
	うち生存救出	348 人
・救急	出動件数	507 件
	ヘリコプター搬送件数	17 件



写真1 落下した新幹線の高架

4 初動体制

激しく異様な揺れで叩き起こされる。縦揺れそして横揺れと激しく身体がもてあそばれ、ピアノ、タンスすべての家具が倒れる。11階建の自宅マンションも崩れ落ちる事を一瞬覚悟する。揺れがおさまり、屋外階段を降りる際数本の火煙を確認し、単車にて約2kmの消防局に向かう。すでに庁舎には多数の市民が助けを求めて駆け付け、ロビーでは職員が負傷者への応急手当を行っている。

3階の管制室では、監視TVの受像機をはじめ機器が倒れていたが119受信は正常で、その内容は救助要請とガス漏れ通報が主で火災通報はゼロであった。

当日の当務員は90人、ポンプ車、タンク車、救急車、救助工作車はすでに出動しているが、火災現場には管制室の窓から覚知した現場に1台しか出動していない。指揮本部を設置し、消防課長と共に防火台に上がって6~7カ所の火災現場を確認する。

市街地全域に及ぶ倒壊家屋からの救出要

請と同時多発火災の双方に対応するため、消火隊と救助隊の部隊統制を行う。火災の発生した地域は、商店街等の老朽木造家屋が密集しており延焼拡大が危惧されたため、「1火災現場1ポンプ」を基本戦術とした。非常招集者が次々に参集し、1分隊に達することに軽四輪車等に可搬式動力ポンプを積載させて現場へ投入した。救助現場にも人員と資器材を最大車両・資器材も無

くなり、徒歩により資器材無しで現場へ派遣した分隊もあった。

このたびの震災は、救助する者自身が被災者であるという最悪の事態であったが、家族が負傷し、職員自らも倒壊家屋の生き埋めになりながらも3時間以内に80%の職員が確保できたことは、崇高な消防魂の発露であると感謝している。

5 問題点及び課題

(1) 想定外の災害への対応

当市の地域防災計画は「梅雨前線の豪雨および台風による水害、高潮、山崩れ等」の被害を想定したものであったこと。

広域応援協定、大規模災害に対する事前計画等いずれも狭い地域の災害を想定したものであり、今回のように市内全域に被害が及び、また数市町にまで及ぶ広域災害は想定していなかったため、兵庫県広域消防相互応援協定等による広域応援が機能しなかった。

車	両	タ	ポ	救 急	梯 子	救 工	化 学	指 揮	通 信
操 作 員		5	4	3	2	0	1	0	1

(2) 必要消防力について

当市の消防力は、消防力の基準と比較して署所の充足率 54%、消防ポンプ自動車の充足率 50%、人員の充足率 57%といずれも低い。平成 6 年 4 月、消防力増強のため 26 人の定員増を行い、これにより平成 6 年 11 月に 4 週 7 休を実施し、平成 7 年 11 月に 4 週 8 休を予定しているが、このときの消防力の考え方は次のとおりである。

署所の配置人員は、上記の操作員に週休要員を加えた数である。なお、救助工作車、化学車は必要時乗換運用を行っており、このたびも乗換により救助工作車は出動している。

当市の出動体制（平常時の建物火災）は、第 1 出動で 6 台（タ 2、ポ 3、梯 1）と消防団が 3 台出動する。過去 10 年間の建物火災 1 件当りの焼失面積は 34 m²で、全国平均の 50 m²を大きく下まわっている。震災以後消防力について議論されているが、平常時の消防力は確保されていたと考えている。然しながら、多くの人命を失ったことは事実であり、消防力の増強は今後も努力していきたい。

なお、平成 7 年度に小型動力ポンプ積載車 10 台、救援車 4 台を導入し、消防力の増強を図る予定である。

(3) 消防団について

消防団との関係は「所轄のもとに」と組織法で定められているが、このたびは早い段階で消防局の指揮下に入るよう消防団長から命令が発せられた。このため各消防団は、管轄の地域で作業が終了すれば、即消防局に参集して消防局の指揮下に入り、消防団車両に消防職員が 1 人同乗して現場に出動した。ポンプ車 38 台、731 人の団員は被害の軽減に大きく寄与したものである。

消防局と消防団は共に訓練を行い、昨年夏の異常渇水時には、消火栓が使えないことへの対策を共に考えてその対策を講じていたが、このことも役立っている。消火、救助活動は 3 日間で終わり、4 日目からは市民が一番困っている飲料水の確保のために、1m³の水槽を積載して 1 カ月間給水活動を実施している。

救助資器材の積載、無線機（現在は傍受機）の積載を検討しているが、さらに消防団との連携を図っていきたい。

(4) 市民の防災対応力

17 日中で、約 4,400 件の 119 番通報を受信している。すべての現場には対応できないため、管制員は通報者に対し「現在消防車は全車出動している。近所の方と協力して

救出してください。火を消してください。」と応答している。非常事態を理解して多くの市民の方が、救助にまた初期消火に協力して下さっている。火災を例にとると、80%の火災に市民の消火協力があり、4件の火災は消防隊の手を経ずに消火器や付近の河川等からのバケツリレーにより消火に成功している。

・自主防災組織

昭和58年から結成し、現在31防災会(110自治会・36,941世帯)、世帯の結成率は22.8%である。

震災での反省点は、消防局からの情報と指示が少ない。会員が被災しており協力が得られない。消火・救出の器材が無い等であったが、自主防災組織として看板があったため、何かしなければという意識が強く働き、実際の行動に結びついたという意見もいただいた。

・婦人防火クラブ

昭和55年から結成し、延べ8,731人のクラブ員を養成している。家庭の防火について研修を実施している。この多くのクラブ員が、各家庭で防火の行動をしてくれている。

・防火保安協会

昭和30年から結成し、会員414事業所、自衛消防隊ポンプ操法をはじめ市民の防火意識の向上を目的にしている。

その他少年防火クラブ1、幼年消防クラブ8、シルバー防火クラブ3がある。

今後も市民の防災力を高めるため、可搬式ポンプ、簡単な救助資器材の配置等も検討したい。

このように、今回の震災で西宮市民は多

くの初期消火と人命救出を行っている。これは市民写真2の防災意識が高かったものと評価される。

(5)医療機関との連携

当市では、救急車への医師同乗制度、医療情報システムの整備、救急隊員の研修等、医療機関との連携を密にしてきたところであるが、初期の段階で次のような反省点がある。

- ・電話が使えないことによる情報連絡の途絶
- ・停電・断水による医療の制約
- ・一時に多くの負傷者の殺到
- ・医薬品等の不足

無線、専用回線等通信手段の確保が早急に必要である。

(6)兵帖(現場隊のために後方にあつて補給等をおこなうこと)の必要性

17日朝5時46分から、職団員は不眠不休の活動が続くが、特に17日は食料等の調達ができず、飲料水・食料が現場隊に届けられたのは夜中の1時である。また、現場で燃料



写真2 フランス災害救助特別部隊の活動

が切れたために灯油でその代用をし、自らその調達に走り回った消防団もあった。

17日から19日までの3日間、11本部4消防団から延べ35台139人の応援を受け、献身的な活動をいただいたが、兵靖に関し隊員の皆様にご迷惑をかけたと反省している。また、自衛隊にも応援をいただいたが、彼等からは兵帖について勉強させていただいた。

(7) 仏災害救助特別部隊の応援

この内容を報告することに躊躇するが、敢えて実情を報告したい。

61人の隊員と捜索犬4頭を西宮市で受け入れるように打診があったのが1月20日、3日間でほぼ救助活動を終了して、この日から消防団は給水活動を実施している現状から応援をお断りしたが、既に出発しており、神戸市にはスイスの救助隊が入っているのので西宮で受け入れるよう強い要請であった。

到着したのが翌日の21日16時頃、早速未救出1人を残す現場に案内して活動をお願いしたが、本当に活動できる現場でなく気の毒であった。翌日からは神戸市に出動されたが、結果は同じことである。

ガス、水道が使えない中での宿舎と食事等のお世話は、我々の消防規模では負担であったし、なによりも遠い国から応援をいただきながら、時機を逸し、活動する現場もなく、25日に帰国された隊員には申し訳無い気持ちで一杯である。

6 おわりに

震災により大きな被害を受けた西宮市は、今復興に向けて大きく前進しています。災害に強い、住み良い西宮の実現のために頑張ってください。

おわりに、全国の消防機関の皆様からいただきました激励とお見舞いに対しまして、心からお礼申し上げます。